トルコの日本研究

セルチュク・エセンベル（ボスポラス大学）

チェコスロバキアと比較してトルコの日本研究はわずかですから、私の話も短くなると思います。ブラッカー先生は昨日東洋と西洋の区別はボスポラス海のどこかではじまる、そしてそこからはイマジナティ・ジオグラフィだと言いましたが、私はそのイマジナティの国境の人間ですから、何とかして一つのそういう場所から日本観、日本研究の状況はどういうふうに見えるかということを、ちょっと申したいと思います。

日本研究は、トルコでは若い。ただ、日本に関しての関心は古いというふうに言っていいでしょう。一応日本研究について話す前に、どうしてトルコではこんなに古い日本への関心と、日本に対しての親日の気持ちが歴史的にあるのかということをちょっと説明したいと思います。その雰囲気は、これからの日本研究の将来にも影響すると思います。

トルコ人が日本のことを一応気にしたのは近代以降です。日本の近代化が明治時代に始まったときには、トルコ人もはじめて、ああ日本という国がありますねというふうに意識して、ジャポン・ジャポンというふうにオットマンの詩人がよく書きました。エキゾティックな国で、遠いところの島国で、サムライという人達が生きているというふうに言われていました。そういう話の関係で、ちょっとだけ日本についてのイメージがありました。日本は大事な国なので、日本のことをちょっと勉強しましょうという気持ちになったのは、近代化との関係だと思います。

オットマン・トルコ人の帝国の人達が近代化の歩みを18世紀の終わりにはじめたと言われている。しかし、オットマン・トルコ人にとっては、

やっぱり近代化ということはいつもヨーロッパ向けですね。ヨーロッパを見て、そこから何とかいろんなことを輸入して、それでオットマン帝国を強くしよう、救おうということですね。そういう目的でしたが、20世紀になってくると、明治維新の後ですね、そろそろオットマンの人達も日本のことを見て、ああやっぱりヨーロッパだけじゃない、日本も近代化の例としてちょっと勉強すべき状況ではないかというふうに考えはじめたのです。

例えば、19世紀の終わりになると、その時期の有名な、割合に保守的で、しかし近代化をも信じた有名なスルタンですが、アブデュルハミド（Abdülhamid）二世が、今までのヨーロッパ向けの近代化をやめるんじゃないけれども、それをちょっと残して日本の例も見ましょうというふうに考え、日本に関しての詳細なリポートを命令したのです。

リポートが準備されたのは19世紀の終わりごろで、このリポートを読んでからはアブデュルハミド二世は自分の日記に、日本に関してのいろいろな考えを詳しく書いています。明治天皇と自分のことを比較したり、オットマンの状況と日本の状況とを比較したりしました。私たちは日本人から何を習えばいいでしょうかと。やっぱりスルタン自身は日本語は知らなかったのですが、最初の日本語学者かなというふうに考えることもできます。少なくとも彼はトルコの日本研究のファースト・ステップを築いたと言っていいかも知れないですね。

その時期のオットマンの資料を見たら、特に日本の近代化に関するコメントが多いんです。オットマンのエリートの人達は、貿易関係とか、政治的な関係とか、特に条約問題では、日本人は何をしているか、我々も困っているから日本人と一緒に交渉して、何とかしてヨーロッパとの条約から逃げることができるんじゃないかとか、独立しましょうとか、

そういう問題意識は深く議論されたと言うことができると思います。

これは第1の時期で、第2の時期はもちろん有名な日露戦争。有名なというのは、私たちのボスポラス海峡から見たら有名ですよ。中近東に来たら、日露戦争の影響が深い。日露戦争が、アジア全体も同じと思いますが、特に中近東では、はじめてアジア人の独立の一つのステップだと考えられているのじゃないかと思います。日本人にアジアの伝統的な敵と思われるロシアが負けたということは安心だ。トルコ人にとっては特にプラグマティックな意味で「ああもう10年戦争しなくていい。日本人にロシアは負けたから、我々もちょっと休んでいいんじゃないか」。ロシア帝国との戦争が18世紀から続いているでしょう。10年に1度は戦争、今度は日本人が勝ったから、私たちはちょっと楽にしたらいいんじゃないかという気持ちで、トルコ人は心から日露戦争のことをおめでたいことだと感じました。これは本当に深い意味を持っていると思うんです。

トルコ人はイスラム教の人で、もちろん生まれる息子にはアフマドとかマホメッドとかアリとか、そういうイスラムの名前をつけるのが当然ですけれども、その時期生まれた長男には、トウゴウやノギと言う名前が多いのです。アフマド・トウゴウさん、マホメッド・ノギさん、そういう日本の有名な大将の名前をつけるのが伝統になったことは、本当に魅力的だと思います。クリスチャンネームみたいにモスリムネームを捨てて、そのかわりに日本語の名前をつけるのは大変珍しいと思います。今でもトルコに来たら、年上の方で、ミスタートウゴウとか、そういうふうなトルコ人に一人か二人ぐらい会えるかもしれません。

その意味では、一人、二人のエリートの人じゃなくて、社会として日露戦争の影響は深くて、やっぱり日本に関してのトルコ人のイメージはそこで決まったと思います。そこである意味では凍結されて、そこから

は20世紀の日本観、トルコ人の日本観が大体日露戦争時期の日本観と言えると思います。

その時期を見たら、残念ながらトルコの国はいつも戦争中で、あんまり教育のことを進めるお金もないし、時間もないし、人材もなかったので、大学自体もあるかないかというぐらいですが、日本学科は全然なかったです。やはり教育の水準としては、あまり言うことはないと思いますが、イスタンブールやエジプトのカイロで出版されている雑誌とか新聞とかを見たら、1910年代には、いつも日本は第1ページで、日本に関してのニュース、日本の文化、日本の女性、日本の子供、日本のファッションが取り扱われているのです。今イスタンブールの図書館の新聞を見たら、アラブ語で書いてある新聞も、トルコ語で書いてある新聞でもよくそういう記事を読むことが出来ます。

例えば、その時期の雰囲気をあらわすそういう資料の例としては、イランのテヘランでは、ある詩人が「ミカドナーメ」(Mikadoname) を書きました。ナーメは有名な中近東の古い習慣なんですけれども、王様に関する伝説的な詩ですね。王様をほめる。シャフナーメ (Shahname) という昔からの古典文学の一つの形式ですが、ミカドナーメも明治天皇に対するシャフナーメのバリエーションの一つだと言っていいと思います。トルコ語で書かれた本は、戦前のチェコスロバキアとちょっと似ていると思いますが、大体その時期はフランス語からの翻訳とか、英語からの翻訳とか、本当にオリジナルな本があまりなかったと言えると思いますが、例外的に一つか二つの研究がその時期も完成されて、今でも日本研究のためには学問的な価値を持っていると思います。

一つは、日露戦争に自分もオブザーバーとして参加した、ずっとはじめから最後まで日本の海軍と一緒にあっちこっちに行って、写真を撮っ

たり日記を書いたオットマンの海軍の大将、ペルティブ・パシャ（Pertev Pasha, 後ほどのデミルハン：Demírhan）という軍人の書いた、10冊ぐらいの日露戦争日記です。これは学問的にも大事な資料だと思うのです。ペルティブ大将がずっと日本の海軍に参加して、後で、東京に帰って、日本にもちょっと住んでいて、トルコに帰国してから、日記を書いて、後で日本に関していろいろな本を書いた方なんです。

二番目の、その時期に書かれた面白そうな本は、本人は軍人じゃないけれども、アブドゥレシッド・イブラヒム（Abdürresid Ibrahím）という、ちょっと面白い人物です。この人はロシアのシベリア生まれで、後でロシアのイスラムの学校で教育を受けて、イスタンブールに来て、イスタンブールで勉強して、オットマンの国籍をもらいました。この人はもともとはタタール人ですけれども、オットマン・トルコの国籍をもらった後は、いろいろその時期のものすごく強力な運動であるパントルコイスト（Pan Turkist）とかパンイスラミスト（Pan Islamist）とか、その時期の有名な政治的な運動ですけれども、そこに割合にアクテティブなメンバーとして参加して、重要な人物になったのです。

この人は、インテリで、新聞記者で、イスラムの学者ですね。有名になったのはイスラムの研究、イスラムの学問、ほかの意味で政治家でもあり、そういう複雑な人物で、この人は1908年に日本に来て２年滞在した後トルコに帰って、それで日記を書いたのです。この日記は、ほかの旅行もありますから旅行物語とも言えるけれども日本の部分が大部分で、２冊の本で、結構オリジナルで、その時期よく日本に来たチェンバレンとか、ラフカディオ・ハーンと比較できる。ヨーロッパ人のビジターの見方じゃなくて、トルコのイスラムの見方からの日本ですね。同じ時期のヨーロッパ人の書いた物と比較するのは大変面白いです。

彼の解釈しているのは、逆の日本ですね。同じ時期にこの人たちがいたということが信じられないくらいに同じものを見ているんですけれども、イブラヒムの言っていることと西洋人の言っていることが矛盾しているみたいなところが面白い。思想史研究には役に立つ興味深い資料になると思います。

その時期のトルコ人の個人の図書を見たら、必ず日本関係の本があるんです。割合自分が進歩的であれば、もちろんフランス語を学んでそれでフランス革命を勉強して、ヨーロッパ史を知らなければならない。また日本のことも勉強しなければならない。そうじゃないと、自分がプログレッシブな、進歩的人物じゃないというふうなことです。それでまた面白い点は、これは政治的な見方と関係がありませんね。例えば、革命軍として活動した青年トルコ人も、日本に関しての本を読んだり、日本を勉強したりということですから、対立している政治的立場の違いはあっても、日本に関してのインタレストは同じですね。日本を近代化の例として、日本に関するものを読まなくちゃならないという気持ちは強いと言えると思います。

その時代は、大体こういうふうになって、第一次大戦と第二次大戦頃には日本がトルコの社会からちょっと離れていると思いますが、日本がもう一度トルコ人の考え方で大事になったのは、ずっと後、60年代です。60年代には、特に経済学者が進めたいと思っている比較研究、比較経済的な近代化ですね。英語で言えばモダニゼーションの思想から見て、日本とトルコの研究、アメリカでは有名なその時期の代表的なものとして、ウォードとロストウ編の『日本とトルコの政治的近代化』(Political Modernization in Japan and Turkey, ed., by Robert Ward and Daukwart Rustow, 1964) が出版される時期は、実はトルコでもトルコ人の学者が

同じテーマのいくつかの本を出版して、やっぱり自分の見方から近代化の比較、今まではトルコは近代化をしたけれども、日本もしたけれども、比較したらどういう相違点があるかというふうに見たんです。

60年代に特にトルコで有名になった本が、ちょっと難しい名前ですが、ドアン・アヴジュオル（Doğan Avcıoğlu）という人が、もともと経済学者で言わば左翼の解釈から経済史の問題意識を持っている方で、そのとき書いた本が3冊の「トルコの制度」。日本語に翻訳すると、英語でも翻訳するとおかしいのですが、彼の言いたいことは、トルコの過去、トルコの今日とトルコの将来、トルコの経済的な制度は何であるか、これから何処に行くのかという、この本は大変印象深くて、トルコではその時期ものすごく人気になった本ですから、ある意味で、トルコのその時期は誰もが読んでそれを議論して、本当にそうじゃないかということを議論したもので、そこのある部分が、日本とトルコの比較です。

割合に今のトルコ人の日本観がその本から出ていると思います。アヴジュオルさんの経済学の見方から解釈している、もっとクリティカルな、批判性が多い日本とトルコの近代化の比較ですね。割合こういう近代化の研究は、一つか二つ続けて、80年代にはメフメット・トゥルグト（Mehmet Turgut）さんという方は、同じ観点から近代化の比較論の本を書きました。彼は学者じゃなくって政治家です。青年トルコ人の時代から、政治家の日本に対する興味ということが続いているというふうに言えるかも知れません。

メフメット・トゥルグトさんもアヴジュオルさんも政治的世界の人たちでした。トゥルグトさんは保守側で、アヴジュオルさんは社会民主主義党です。だから、割合に政治観は違うけれども、二人ともが日本のことに感心して、日本とトルコの近代化を比較して、日本の近代化の見習

うべきところを発見しようとしたのです。今後とも日本のことを大事に勉強しなければならないというその考え方は続くと思います。

政治観とか世界観は変わっても、日本に関してトルコ人の関心は統一しているんですね。

私にとっては、イブラヒムさんとペルティブ大将の時代から、最後のトゥルグトさんとアヴジュオルさんの大臣の研究を全部含めて考え、トルコ人の一番代表的な日本観は何だというふうに言ったら、3つの点が言えると思います。1つは、いいことか悪いことか知りませんが、トルコ人は不思議に日本の文化にはあんまり興味がないということが言える。これはちょっとおかしい点です。割合に日本ということに関心が持たれてからは、世界中の国民が最初に気にしたことは、日本の文化の魅力的な特色、ユニークな特色ですね。日本の文化の繊細な特色、エレガンスとか言えるでしょうね。たとえば、イブラヒムもそれをもちろん意識しているんですけれども、いつも1行か2行くらい。

「日本の文化は偉いです。本当にこの人たちは素敵な文化を持っているけれども、大事なことは政治ですよ」と。経済と政治。イブラヒムのようなトルコ人は、文化の世界というよりは、政治的な、経済的な社会のメンバーのひとりとして日本を考えているのです。ある意味でトルコ人は、日本の文化の面での知識はあんまりなかったし、その点でものすごく弱かったと思いますが、かわりに日本とトルコを普遍的な歴史的な流れの中に入れたと思うのです。日本のことを国際化したんです。

トルコ人は日本のことを全然ユニークと考えない。日本は日本だけで、ほかの国には学べないとか、関係ないとか、そう考えなくて、日本人は我々と割合に同じ道の人たちだと考えたわけです。あの人たちは賢くて、このことはよくやりましたとか、あのことはよくやりましたとか、私は

比較したら、経済的な面でこれをやりましょうか、あれをやりましょうとか、そういうふうに考えているんです。私はどうもこれはちょっとおかしいと思う。ともあれ、こんなに深い価値をもっている日本の文化を、ある意味で関心がなくて、政治と経済の観点だけから同じ世界のメンバー、兄弟ですというふうに考えているのは、トルコ人の日本観の一番重要な特色でしょう。

二番目のもっと学問的な意味から批判すべき特色は、トルコ人が日本の文化を「和魂洋才」と考えている点でしょう。戦前の日本の文化がそのまま守られて、西洋から科学技術だけが輸入されて、日本人はちっとも西洋の文明と関係なしに、近代化した。こんな簡単な結論ですね。それはもちろん全然日本の歴史と事実的な関係もないし、日本の歴史はもっと複雑ですよ。そんなに簡単に技術だけを輸入して、パッと日本を近代化したというわけにいかないでしょう。やっぱりトルコ人の日本観は、日本が文化的に全然変わらなかった、自分の古い文化を変えずに、直さずに、捨てずに、守った。それで技術だけを輸入して近代化しているというのは、ある意味でものすごく単純な話で、もちろん歴史的にも正しくないし、日本に関してちょっとシンプルすぎるイメージです。あんまり単純なイメージになってきているんですから、私はそれを批判する義務を自分で感じているんです。

このような単純な見方は一つの危ない結論をもたらすと思います。トルコのあるグループの考え方でも、前から長くいままで続けていると言えると思いますが、日本が文化を変えず近代化したから、私たちもイスラム教を復活して、トルコはまた憲法を捨てて、イスラムの憲法に戻すということになるわけです。それは日本的になるということだというわけです。何かわかりにくい論理なんですよ。イスラムと日本は関係ない

し、もちろん日本に宗教がありますけれども、憲法は別に宗教的ではないのです。

どうしてそういうふうに考えているのか。今の日本というイメージがないからですね。実は今でも残っているイメージは、日露戦争のイメージです。日露戦争から和魂洋才がトルコの新聞に入って、国民に広がったと思います。トルコの人たちの頭には、日露戦争の日本がそのまま続けている。第二次大戦もない。第二次大戦の後の新しい憲法もない。古いままの日本というイメージはある意味で危ない、ある意味で間違いというふうに言えると思います。これからの日本研究も、こういうトルコ人の日本イメージの中から脱出し、割合に日本に関してもっと学問的ないろいろなイメージとか、いろいろな意見を教えなければならないと思います。

日本研究のことに戻して、トルコで本格的な日本研究が始まったのは、わずか10年前からなんです。日本に関してこういう関心もあって、研究しておりましたけれども、大学で日本のことが正式に勉強されるようになったのは80年代です。最初は、1985年です。アンカラ大学（Ankara Univ.）の文学部に日本学科が設置されました。中国学科の教授のプラト・オツカン（Pulat Otkan）さんと私は協力して日本学科を整備しました。はじめて日本学科の学生たちは、トルコの全国国立大学入学試験から日本学を選んで入学してきたのです。

私は1年だけアンカラ大学に任命されて、プラトさんと一緒に教えていました。私の後は日本人の先生が日本から来て、毎年新しい先生が来るようになりました。今年から交流基金の専門的な先生も、2、3年ずっと滞在するように、この学科を教える計画になったと聞きました。このアンカラ大学の日本学科は、最初の草分けです。

二番目は、中東技術大学（Middle East Technical University）というところで、メテ・トゥンジョク（Mete Tuncoku）先生という方が国際関係学科で日本国際関係をずっと教えていました。京大の博士のプログラムを修了した人ですが、日本の大学院を修了した社会学の、多分最初の例だと思います。技術系の例は結構いますが、社会学と国際関係ではトゥンジョクさんが最初だと思います。トゥンジョクさんのもとでも日本語が教えられるようになったのは去年からだと思います。

また、アンカラでは、人類学科のもとで、ボズクルト・ギュヴェンチ（Bozkurt Güvenç）先生が人類学科の科目としては日本の社会の研究、日本社会の人類学の見方からの研究を教えているのです。ボズクルト・ギュヴェンチ先生が10年前に、日本文化に関しての大変面白い本を、トルコ語で出版しました。これはだいぶん評価が高くて、すごく人気のある本です。日本文化の本は、ある意味ではトルコの文化と日本文化を比較するという面もありますから、結構オリジナルなことです。

インスタンブールに戻れば、イスタンブールは私のいるところですけれども、ボスポラス大学（トルコ語でボアジチ（Boğaziçi）と言いますが）で、日本史と日本文化を教えているんです。歴史学科の科目の中の一つとして教えられています。歴史学科を卒業する学生たちの義務教育ですから、ある意味で世界史の中のある部分として日本の部分を私がやっているということになっているのです。この4年、ヨーロッパ史、東洋史、またトルコ史を習っている学生たちには重要な授業にするように頑張っているんです。

2年前に同じ学科では、大学の学生全体が取れる4年の日本語の講座が始まったばかりです。私たちは運がよくて、ものすごく素敵な先生を学科で雇うことができました。マリコ・エルドアン（Mariko Erdoğan）

という日本人の方なんですれども、彼女は日本語の先生で、熱心にやっているんです。

今のところ、10年の間には、アンカラとイスタンブールでは、小さいグループですけれども、どんどん日本語を勉強している日本学科の学生の人数が増えてきているので、これから将来は、もっと学問的に進んで、日本研究の学者になれる人たちが出るのは、もちろん私たちの祈りですが、このためにはトルコでは図書館も足りないし、教材も足りない状態です。国際交流基金はアンカラでも、イスタンブールでも援助してくれて感謝しています。私たちの目的としては、一応卒業したら自分の専門を続けるために、日本に行きたい学生に日本語を4年間教えるということです。また、二番目のもっと大事な目的は、このグループの中から日本研究の学者になれる人たちを、また外国で、日本で、ほかの国でも日本の学者になれるように教育させることですね。これが、これからの目的です。

（1990年3月）